

薬物動態

健康成人被験者および化学療法を受けている癌患者を対象とした試験で本剤の薬物動態が評価されている。健康な男性 18 例に 50 mcg/kg の用量で本剤を単回皮下投与した 1 件の試験では、本剤投与後 3.2 ± 2.4 時間 (T_{max}) の時点で、最高血清濃度 (C_{max}) [17.4 ± 5.4 ng/mL (平均値 \pm S.D.)] に達した。消失半減期は、 6.9 ± 1.7 時間であった。健康被験者 24 例に 75 mcg/kg の用量で本剤を単回で皮下投与および静脈内投与した 2 件目の試験では、薬物動態プロファイルは男女間で同程度であった。本剤の絶対的バイオアベイラビリティは、80%を超えていた。化学療法を受けている癌患者に本剤を 25 および 50 mcg/kg の用量で反復皮下投与した 1 件の試験では、本剤は(体内に)蓄積せず、反復投与後に本剤のクリアランスは阻害されなかった。

ICE (イホスファミド, カルボプラチン, エトポシド) 化学療法を受けている小児患者 (生後 8 カ月から 18 歳) 43 例と成人患者 1 例に、25~125 mcg/kg/日の用量で本剤が投与された。小児患者 40 例のデータの解析から、小児患者における本剤の C_{max} , T_{max} および消失半減期が、成人の場合と同程度であることが明らかになった。50 mcg/kg の用量で本剤の投与を受けた小児患者 (生後 8 カ月から 18 歳) における濃度 - 時間曲線下面積 (AUC) の平均値は、同用量で本剤の投与を受けた健康成人の値の約半分であった。得られたデータは、小児において本剤のクリアランスが年齢の増加とともに低下することを示唆している。

20~79 歳の健康な男性および女性成人 48 例 (18 例が 65 歳以上) に、50 mcg/kg の用量で本剤が単回皮下投与された。本剤の薬物動態プロファイルは、65 歳以上の被験者と 65 歳未満の被験者との間で同程度であった。

ラットを用いた前臨床試験では、放射性標識した本剤は血清から急速に消失し、(血液が)よく滲流する臓器に分布した。腎臓が本剤の主要な排泄経路であった。本剤の未変化体の量は尿中では少なく、本剤が排泄される前に代謝されることを示していた。1 件の臨床試験では、重度の腎機能障害患者 (クレアチニンクリアランスが 30 mL/min 未満) に本剤が単回投与された。その結果、 C_{max} と AUC の平均値 \pm S.D. はそれぞれ、 30.8 ± 8.6 ng/mL と 373 ± 106 ng·hr/mL であった。当該試験では、腎機能が正常な対照被験者と比較して、重度の腎機能障害患者の C_{max} の平均値は 2.2 倍高く、AUC の平均値は 2.6 倍高かった (95%信頼区間: 1.7%~3.8%)。重度の腎機能障害患者における本剤のクリアランスは、腎機能が正常な被験者の値の約 40%であった。消失半減期の平均値は、重度の腎機能障害患者と腎機能が正常な被験者との間で同程度であった。

腎機能の程度が異なる 24 例を対象とした 2 件目の臨床試験も実施され、1 件目の試験の結果が確認された。50 mcg/kg の用量で本剤が無作為に単回で皮下投与および静脈内投与された。腎機能障害の程度が増すにつれて、本剤の AUC は増加したが、(消失)半減期は変化しなかった。腎機能障害患者 6 例の C_{max} と AUC の平均値 \pm S.D. はそれぞれ、 23.6 ± 6.7 ng/mL と 373 ± 55.2 ng·hr/mL であり、一方、腎機能が正常な被験者 6 例の値はそれぞれ、 13.1 ± 3.8 ng/mL と 195 ± 49.3 ng·hr/mL であった。本剤の静脈内投与後は、曝露量には同程度の増加が認められた。

薬物動態試験では、腎機能の低下につれて、オプレルベキンへの全曝露量が増加することが示唆されている。このことから、重度の腎機能障害患者に対しては、本剤の投与量を 50%減量することが妥当である (使用上の注意「腎機能障害患者への投与」および用法・用量を参照のこと)。これよりも腎機能低下の程度が小さい患者に対しては、減量の必要はない。

薬力学

骨髄抑制が認められない癌患者に本剤を投与した 1 件の試験では、本剤を 14 日間連日皮下投与した結果、用量依存的に血小板数が増加した。本剤の投与開始後 5~9 日の間に血小板数は、ベースライン値に対して増加し始めた。投与中止から 7 日後まで血小板数は継続して増加し、その後 14 日以内にベースライン値に戻った。本剤の投与に関連して、血小板の反応性 (ADP に反応する血小板活性化ならびに ADP, エピネフリン, コラーゲン, リストセチンおよびアラキドン酸に反応する血小板凝集により測定) に変化は認められていない。

健康志願者を対象とした 1 件の無作為化二重盲検プラセボ対照試験では、本剤の投与を受けた被験者に 20%

を超える平均血漿量の増加が認められ、本剤の投与を受けたすべての被験者に、10%以上の血漿量の増加が認められた。赤血球量は、(繰り返し瀉血することにより)本剤群とプラセボ群とで同程度減少した。結果として、プラセボ群の被験者と比較して本剤群の被験者では、全血量は約10%増加し、ヘモグロビン濃度は約10%低下した。プラセボ群の被験者と比較して本剤群の被験者では、24時間のナトリウムの平均排出量は減少し、カリウムの平均排出量は増加しなかった。

臨床成績

成人を対象とした2件の無作為化二重盲検プラセボ対照試験では、一連のサイクルからなるさまざまな骨髄抑制化学療法を単回または複数回繰り返し実施後の重度の血小板減少症の予防を目的として、本剤が検討された。

化学療法誘発性の血小板減少症の既往歴のある患者を対象とした試験

1件の試験では、重度の化学療法誘発性の血小板減少症(血小板数が20,000/ μ L以下と定義される)の発現から回復した患者における血小板輸血の必要性の解消に対する本剤の有効性が評価された。当該試験で、患者は以前に受けたのと同じ化学療法を減量することなくさらに1サイクル受けることになっていた。患者は、基礎疾患としてさまざまな非骨髄性の悪性腫瘍を発症しており、さまざまな投与方法による用量強化化学療法を受けていた。患者は、本剤25 mcg/kg群、本剤50 mcg/kg群またはプラセボ群に無作為に割り付けられた。主要評価項目は、以前に受けたのと同じ化学療法をさらに1サイクル繰り返した際に、患者が1回以上の血小板輸血を必要とするかどうかであった。当該試験では、93例が無作為に割り付けられた。治験薬の投与前に5例が試験を中止した。結果として、修正したintent-to-treat解析には88例が含まれた。本剤50 mcg/kg群およびプラセボ群の結果を表1に要約する。プラセボ群には、化学療法を減量し血小板輸血を回避した1例が含まれる。

表1 試験の結果

| | プラセボ群 n=30 | ニューメガ 50 mcg/kg 群 n=29 |
|--------------------|---------------|---------------------------|
| 血小板輸血を回避した患者数 (%) | 2 (7%) | 8 (28%) |
| 血小板輸血を必要とした患者数 (%) | 28 (93%) | 21 (72%) |
| 血小板輸血回数の中央値 (平均値) | 2.5 (3.3) | 1 (2.2) |

有効性の主要解析では、プラセボ群よりも本剤50 mcg/kg群で多くの患者が、血小板輸血を回避した[p = 0.04, フィッシャーの正確検定(両側)]。本剤50 mcg/kg群とプラセボ群との間で血小板輸血を回避した患者の割合の差は、21% (95%信頼区間: 2%~40%)であった。本剤25 mcg/kg群の患者の結果は、プラセボ群と50 mcg/kg群の間の中間の結果であった。

用量強化化学療法を受けている患者を対象とした試験

2件目の試験では、重度の化学療法誘発性の血小板減少症の既往がない乳癌患者を対象として、2サイクルの用量強化化学療法期間にわたって、血小板輸血の回避に対する本剤の有効性が評価された。当該試験では、すべての患者が同じ化学療法(シクロホスファミド 3,200 mg/m²およびドキシソルピシン 75 mg/m²の投与)を受けた。すべての患者は、すべてのサイクルで、フィルグラスチム(G-CSF)の併用投与を受けた。患者は、化学療法歴の有無により層別され、本剤50 mcg/kg群またはプラセボ群に無作為に割り付けられた。主要評価項目は、2サイクルの用量強化化学療法において、患者が1回以上の血小板輸血を必要としたかどうかであった。77例が無作為に割り付けられた。13例が2サイクルの用量強化化学療法を完了しなかった。このうち8例のデータは、主要評価項目を評価するには不十分なものであった。当該試験の結果を

表2に要約する。

表2 試験の結果

| | 全患者 n=77 | | 化学療法歴のない患者 n=54 | | 化学療法歴のある患者 n=23 | |
|--------------------|---------------|----------------|--------------------|----------------|--------------------|----------------|
| | プラセボ群 n=37 | ニューメガ群 n=40 | プラセボ群 n=27 | ニューメガ群 n=27 | プラセボ群 n=10 | ニューメガ群 n=13 |
| 血小板輸血を回避した患者数 (%) | 15 (41%) | 26 (65%) | 14 (52%) | 19 (70%) | 1 (10%) | 7 (54%) |
| 血小板輸血を必要とした患者数 (%) | 16 (43%) | 12 (30%) | 9 (33%) | 7 (26%) | 7 (70%) | 5 (38%) |
| 評価不可能な患者数 (%) | 6 (16%) | 2 (5%) | 4 (15%) | 1 (4%) | 2 (20%) | 1 (8%) |

当該試験では、主要評価項目の結果において、本剤を投与された患者、特に化学療法歴のある患者の部分集団に優位性が認められた。4 サイクル連続の化学療法期間まで好中球の回復率に対するいかなる有害作用の証拠も認められないか、赤血球輸血が必要とされることはなく、非盲検下で本剤が継続して投与された。一部の患者では、一連の4 サイクルの化学療法期間中に、輸血、化学療法の減量または治療スケジュールの変更が必要になることなく、血小板数の最低値は絶えず 20,000/ μ L を超えていた。

限られた数の患者を対象として実施された血小板活性化に関する試験では、自発的な血小板活性化の異常または ADP に対する反応異常の証拠は認められなかった。2 件のプラセボ対照試験についての非盲検のレトロスペクティブ解析では、本剤 50 mcg/kg 群の 69 例中 19 例 (28%) およびプラセボ群の 67 例中 34 例 (51%) で、出血を含む出血性有害事象が 1 件以上報告された。

骨髄除去的化学療法実施後の患者を対象とした試験

骨髄除去的化学療法および自己骨髄移植後に本剤非投与群 (n=26)、本剤 25 mcg/kg 群 (n=28) または本剤 50 mcg/kg 群 (n=26) に割り付けた、高リスクの乳癌女性患者 80 例を対象とした無作為化二重盲検プラセボ対照第 2 相試験では、血小板輸血の実施率ならびに好中球および血小板の生着までの時間は、本剤の全投与群とプラセボ群とで同程度であった。当該試験では、プラセボよりも本剤の投与を受けた患者において、浮腫、結膜出血、低血圧および頻脈の発現率が統計的に有意に高いことが明らかになった。

患者の長期フォローアップでは、生存分布および無増悪生存期間は、本剤群とプラセボ群に無作為に割り付けられた患者との間で同程度であった。

効能・効果

本剤の適応症は、重度の血小板減少症のリスクが高い非骨髄性の悪性腫瘍を有する成人患者において、骨髄抑制化学療法実施後の重度の血小板減少症の予防および血小板輸血を必要とする回数の低減である。過去の化学療法サイクル後に重度の血小板減少症を発現したことがある患者において、本剤の有効性が実証された。本剤は、骨髄除去的化学療法実施後の患者には適応とならない (**警告「骨髄除去的化学療法実施後の毒性増大」**を参照のこと)。小児患者では、本剤の安全性および有効性は確立されていない。

禁忌

本剤は、本剤または本剤の成分のいずれかに対する過敏症の既往がある患者には禁忌である (**警告「アナフィラキシーなどのアレルギー反応」**を参照のこと)。

警告

アナフィラキシーなどのアレルギー反応

市販後調査の結果、本剤は、アレルギー反応または過敏反応（アナフィラキシーなど）を引き起こしている。本剤を投与する際には、万が一アレルギー反応が生じる場合に備えて適切な予防措置を講じること。さらに、患者は治療を受ける必要がある症状についてカウンセリングを受ける必要がある（使用上の注意「患者のための情報」を参照のこと）。報告されている徴候および症状は、顔面、舌または喉頭の浮腫、息切れ、喘鳴、胸痛、低血圧（ショックを含む）、構語障害、意識消失、精神状態変化、発疹、蕁麻疹、潮紅および発熱である。アレルギー反応または過敏反応は、本剤初回投与またはそれ以降の投与後に生じる。アレルギー反応または過敏反応を示すすべての患者に対して、本剤の投与を恒久的に中止すること（枠組み警告、禁忌、副作用および副作用「免疫原性」を参照のこと）。

骨髄除去的化学療法実施後の毒性増大

本剤は、骨髄除去的化学療法実施後の患者には適応とならない。1件の無作為化プラセボ対照第2相試験で、（当該療法実施後の）本剤の有効性は実証されなかった（臨床成績「骨髄除去的化学療法実施後の患者を対象とした試験」を参照のこと）。当該試験では、プラセボ群と比較して、本剤群の患者における浮腫、結膜出血、低血圧および頻脈の発現率は統計的に有意に高かった。

市販後の本剤の使用について、骨髄移植後に本剤の投与を受けた患者で、以下の重度または致命的な副作用が報告されている。体液貯留または体液過剰（顔面浮腫、肺水腫など）、毛細血管漏出症候群、胸水、心嚢液貯留、視神経乳頭浮腫および腎不全。

体液貯留

本剤は、末梢性浮腫、労作性呼吸困難、肺水腫、毛細血管漏出症候群、心房性不整脈および既存の胸水の増悪を招くことがある重篤な体液貯留を引き起こすことが知られている。本剤の投与を受けたことがある患者で、最近の骨髄移植後に、死亡に至ることもある重度の体液貯留が発現したことが報告されている。本剤は、骨髄除去的化学療法実施後の患者には適応とならない（臨床薬理「薬力学」、警告「骨髄除去的化学療法実施後の毒性増大」、警告「心血管イベント」および警告「希釈性貧血」を参照のこと）。臨床的に明らかでない血性心不全患者、うっ血性心不全を発現しやすい患者、積極的な水分補給を受けている患者、心不全の既往歴があり代償性が良好で適切な薬物療法を受けている患者、関連疾患により体液貯留を発現する可能性がある患者または体液貯留により本人の疾患が悪化する可能性がある患者に対しては、本剤を慎重に使用すること。

体液貯留は、本剤の投与中止後数日以内に回復する。本剤の投与中は体液バランスを監視する必要があるため、適切な医学的管理が推奨される。

長期利尿療法を受けている患者については、体液および電解質の状態を緊密に監視すること。長期利尿療法およびイホスファミドの投与を受けていた本剤投与患者のうち、重度の低カリウム血症を発現した患者が突然死した（副作用を参照のこと）。

既存の液貯留（心嚢液貯留または腹水など）を監視すること。医学的に適応とされる場合にはドレナージを検討すること。

希釈性貧血

本剤の投与により、赤血球量の減少を伴わない、ヘモグロビン濃度、ヘマトクリットおよび赤血球数の中等度（約10%～15%）の低下が認められている。このような変化の主因は、腎臓へのナトリウムおよび水貯留に関連する血漿量の増加（希釈性貧血）である。一般的に、ヘモグロビン濃度の低下は、本剤の投与開始後3～5日以内に始まり、本剤の投与中止後約1週間で回復する（警告「体液貯留」を参照のこと）。

心血管イベント

本剤の使用は、心血管イベント（不整脈および肺水腫など）に関連する。心停止が報告されているが、本剤との因果関係は不明である。心房性不整脈の既往歴のある患者に対しては、期待される利益に関して潜在的リスクを考慮した後でのみ、本剤を慎重に使用すること。臨床試験では、50 mcg/kg の用量で本剤の投与を受けた患者の15%（157例中23例）に心房性不整脈（心房細動または心房粗動）などの心イベントが発現した。不整脈の発現期間は通常短期であり、洞調律への変換は一般的に、自然にまたは心拍数コントロール薬による治療後に生じる。本剤の再投与を受けた患者の約半数（24例中11例）が、再発性の心房性不整脈を発現した。本剤の投与中に心房性不整脈を発現した患者で、脳卒中などの臨床的続発症が報告されている。

不整脈を引き起こすメカニズムは不明である。動物モデルでは、本剤に直接的な催不整脈作用は認められなかった。一部の患者では、心房性不整脈の発現の原因は、体液貯留に関連する血漿量の増加である可能性がある（警告「体液貯留」を参照のこと）。

市販後調査では、一般的に本剤の投与開始後2～7日以内に心室性不整脈が発現することが報告されている。

神経系イベント

本剤の投与中に心房細動／心房粗動を発現する患者で、脳卒中が報告されている（警告「心血管イベント」を参照のこと）。脳卒中または一過性脳虚血性発作の既往歴のある患者も上記事象を発現するリスクが高い可能性がある。

視神経乳頭浮腫

臨床試験で、本剤の投与サイクルを繰り返した後に、患者の2%（405例中10例）で、視神経乳頭浮腫が報告されている。その発現率は、成人[1%（362例中3例）]よりも小児[16%（43例中7例）]において高かった。4～13週間1,000 mcg/kgの用量で本剤の連日皮下投与を受けたヒト以外の霊長類が、炎症またはその他のいかなる組織学的異常にも関連しない視神経乳頭浮腫を発現した。当該事象は、本剤の投与中止後に回復した。既存の視神経乳頭浮腫患者または中枢神経系に關与する腫瘍患者に対しては、投与中に視神経乳頭浮腫が悪化または発現する可能性があるため、本剤を慎重に使用すること（副作用を参照のこと）。視神経乳頭浮腫患者に本剤を投与すると、霧視から失明までの視力の変化および（または）視野欠損が発現する可能性がある。

使用上の注意

一般的注意

化学療法薬の投与終了後6～24時間経過して本剤の投与を開始すること。本剤を細胞毒性化学療法薬投与の直前に投与もしくはこれと併用投与した際または予測される（血小板数の）最低値の時点で投与開始した際の安全性および有効性は、確立されていない（用法・用量を参照のこと）。

5日間を超える化学療法または遅延型骨髄抑制と関連する療法（ニトロソウレア、マイトマイシンCなどによる療法）を受けている患者については、本剤の有効性は評価されていない。

長期投与

本剤は、推奨される投与スケジュール（用法・用量を参照のこと）により、化学療法の実施後6サイクルまで安全に投与されている。本剤の長期投与の安全性および有効性は、確立されていない。ヒト以外の霊長類への本剤の連続投与（2～13週間）では、関節包および腱の線維症、骨膜性骨増殖症の発現が確認されている（使用上の注意「小児等への投与」を参照のこと）。上記所見とヒトとの関連性は不明である。

患者のための情報

医療専門家の指示および監督下で本剤を使用すること。しかし、病院または診療の場以外で本剤を使用して

もよいと医師が判断する場合、本剤を投与する者は、本剤の適切な用量、溶解方法および投与方法に関して指導を受けること（用法・用量を参照のこと）。自宅での本剤の使用が処方される場合、患者は本剤の適切な廃棄の重要性に関して指導を受け、注射針、注射器、製剤および希釈剤の再使用に対して注意する必要がある。使用済み注射針を廃棄する際には、患者は耐穿刺性の容器を用いる必要がある。

患者には、本剤の投与に関連する重篤で主な副作用（アレルギーまたは過敏反応に関連する症状など）に関する情報を提供すべきである（枠組み警告を参照のこと）。患者には、以下の徴候または症状のいずれかがみられた場合、直ちに治療を受けるように助言すべきである。顔面、舌または咽頭の腫脹、呼吸困難、嚥下困難または会話困難、息切れ、喘鳴、胸痛、咽喉絞扼感、頭部ふらふら感、意識消失、錯乱、傾眠状態、発疹、そう痒、蕁麻疹、潮紅および（または）発熱。軽度から中等度の末梢性浮腫および労作性息切れが、本剤の投与から 1 週間以内に発現する可能性があり、投与期間を通じて持続することがある。既存の胸水またはその他の滲出液が認められるかうっ血性心不全の既往歴がある患者には、呼吸困難が悪化した場合には医師に連絡するように助言すべきである（副作用および警告「体液貯留」を参照のこと）。本剤の投与を受けるほとんどの患者が、貧血を発現する。患者には、心房性不整脈に起因する症状がみられた場合、医師に連絡するように助言すべきである。妊娠可能な女性患者には、本剤の胎児に対するリスクの可能性について忠告すべきである（使用上の注意「妊娠カテゴリーC」を参照のこと）。

検査所見のモニタリング

本剤による治療中は、化学療法の実施前、そして定期的に全血球数のデータを得ること（用法・用量を参照のこと）。予測される血小板数の最低値の時点で、また血小板数の十分な回復がみられるまで（最低値が得られた後の血小板数が 50,000/ μ L 以上となるまで）、血小板数を監視すること。

薬物相互作用

本剤を評価する試験に参加したほとんどの患者は、フィルグラスチム（G-CSF）との併用投与を受けた。その際に、G-CSF の活性に対する本剤の有害な作用は認められなかった。ヒトでの臨床使用として、本剤とサルグラモスチム（GM-CSF）との併用投与に関する情報は得られていない。しかし、ヒト以外の霊長類を用いて本剤と GM-CSF とを併用投与した 1 件の試験では、本剤と GM-CSF との間に有害な相互作用は認められず、（GM-CSF との併用により）本剤の薬物動態プロファイルに明らかな変化はみられなかった。

本剤とその他の薬剤との薬物相互作用は十分に評価されていない。本剤の *in vitro* および非臨床の *in vivo* での評価に基づくと、既知の P450 酵素の基質との薬物-薬物相互作用は予測されないと考えられる。

発癌性、変異原性、生殖能障害（受胎能への影響）

本剤の発癌潜在能を評価する試験は実施されていない。In vitro では、本剤は、さまざまなヒト悪性腫瘍を有する患者から採取した腫瘍コロニー形成細胞の成長を刺激しなかった。In vitro 試験の結果から、本剤は遺伝毒性を示さないことが明らかになっている。これらのデータは、本剤が変異原性を示さないことを示唆している。ヒト用量の 2~20 倍の用量を投与した場合、性周期の延長が指摘されているが、ラットに最大 1000 mcg/kg/日の用量まで本剤を投与した際に、受胎能に対する本剤の影響は認められていない。

妊娠カテゴリーC

妊娠中のラットおよびウサギにヒト用量の 0.2~20 倍の用量で投与した場合、本剤は胚傷害性を示すことが明らかになっている。妊婦を対象とした本剤に関する適切かつ十分に管理された比較対照試験は実施されていない。潜在的ベネフィットが胎児に対する潜在的リスクを上回ると判断される場合のみ、本剤を妊婦に投与すること。

ラットを用いた受胎能、初期胚発生および出生前後の発生に関する試験、ラットおよびウサギを用いた器官

形成に関する試験（催奇形性試験）で、本剤が検討されている。ラットに対してヒト用量の 2～20 倍の用量（100 mcg/kg/日以上）で、また、ウサギに対してヒト用量の 0.02～2.0 倍の用量（1 mcg/kg/日以上）で本剤を投与した際に、親動物への毒性が認められている。妊娠ラットにおける当該試験の所見は、投与後の一過性の活動性低下および呼吸困難（母動物への毒性）だけでなく、性周期の延長、早期胚死亡の増加および生存胎児数減少であった。さらに、ヒト用量の 20 倍の用量で本剤を投与したラットに、胎児低体重ならびに骨化した仙椎および尾椎数の減少（すなわち、胎児発生の遅延）が認められた。妊娠ウサギにおける当該試験の所見は、糞便／尿排泄量の減少（1 mcg/kg/日の用量で本剤を投与した母動物において認められた唯一の毒性）だけでなく、摂食量の減少、体重低下、流産、胚死亡および胎児死亡の増加ならびに生存胎児数の減少であった。ウサギに対してヒト用量の 0.6 倍までの用量（30 mcg/kg/日）で本剤を投与した際には、催奇形作用は認められなかった。

妊娠および授乳の両方の期間中に、ヒト用量の 2 倍以上（100 mcg/kg/日以上）の母体中毒性量となる用量で本剤を投与したラットの第一世代出生児に発現した有害作用は、新生児死亡率の上昇、授乳 4 日生存率の低下および授乳期間中の体重減少であった。妊娠および授乳の両方の期間中に、ヒト用量の 20 倍の用量（1000 mcg/kg/日）で本剤を投与したラットでは、母動物への毒性および第一世代出生児の成長遅延の結果、第二世代出生児の胎児死亡率は上昇した。

授乳婦への投与

本剤がヒトの乳汁に排泄されるかどうかは不明である。多くの薬剤がヒトの乳汁中に排泄され、本剤により乳児に重篤な副作用が発現する可能性があるため、母体への本剤投与の重要性を考慮して、授乳を中止するか本剤の投与を中止するかの判断をすること。

小児等への投与

本剤の安全量および有効量は、小児では確立されていない。1 件の第 1 相単群用量漸増試験では、小児患者 43 例が ICE 化学療法の実施後に 25～125 mcg/kg/日の用量で本剤の投与を受けた。当該試験では、すべての患者が血小板輸血を必要とした。また、対照薬群が設定されていなかったため、当該試験デザインは、本剤の有効性を評価するには不十分であった。小児について予測された有効量（健康成人における有効量に対して観察されたのと同程度の AUC に基づいて予測）は、小児における最大耐量（50 mcg/kg/日）を上回ると考えられる（臨床薬理「薬物動態」を参照のこと）。視神経乳頭浮腫は用量制限毒性であり、小児の 16%に発現した（警告「視神経乳頭浮腫」を参照のこと）。

小児を対象とした試験でみられた主な有害事象は、頻脈（84%）、結膜充血（57%）、X 線像および心エコーによる心拡大の証拠（21%）、骨膜の変化（11%）であった。これらの事象は、成人よりも小児に高頻度に発現した。上記以外の（小児における）有害事象の発現率は、化学療法を受けている成人患者を対象とした無作為化試験において、50 mcg/kg の用量で本剤が投与された場合の発現率とおおむね同程度であった（副作用を参照のこと）。

種々の動物試験の結果から、小児の骨の発生に対する本剤の影響が予測された。100, 300 または 1000 mcg/kg/日の用量で 28 日間以上本剤を投与した成長期のげっ歯類には、大腿骨および脛骨の成長板の肥厚が認められた。このような肥厚は、28 日間の非投与期間の後にも完全には消退しなかった。ヒト以外の霊長類を用いた本剤の 1 件の毒性試験では、10～1000 mcg/kg の用量で 2～13 週間本剤の投与を受けた動物に一部可逆的な関節包および腱の線維症ならびに骨膜性骨増殖症が認められた。本剤を複数サイクル投与した小児を対象とした試験では、1 例で大腿骨、脛骨および腓骨の骨幹部に無症候性の層状骨膜反応が認められている。これらの所見と本剤の投与との関係は不明である。成長および発生に対する本剤の長期的な影響を評価する試験は実施されていない。

高齢者への投与

本剤の臨床試験には、若年被験者と比較して本剤に対する反応が異なるかどうかを判断するのに十分な数の 65 歳以上の患者は含まれなかった。1 件の比較対照試験では、さまざまな非骨髄性の悪性腫瘍を有する成人

患者 141 例が、化学療法終了後に 14 日間本剤 50 mcg/kg/日群またはプラセボ群に 2:1 の割合で無作為に割り付けられて皮下投与を受けた。65 歳未満の 106 例において、血小板輸血を必要としなかった患者の割合は、本剤群の方が（プラセボ群よりも）高かった（36.5%と 14.3%）。65 歳以上の 35 例において、血小板輸血を必要としなかった患者の割合は、投与群間で同程度であった（本剤群とプラセボ群でそれぞれ、32%と 30%）。

腎機能障害患者への投与

本剤は、主として腎臓により排泄される。さまざまな重症度の腎機能障害患者を対象として、本剤の薬物動態が検討された。重度の腎機能障害患者（クレアチニンクリアランスが 30 mL/分未満）において、 AUC_{inf} 、 C_{max} および絶対的バイオアベイラビリティは有意に増加した（用法・用量を参照のこと）。軽度または中等度の腎機能障害患者では、薬物動態パラメータに有意な変化は認められなかった。本剤の単回投与後の第 2 日に、すべての重症度の腎機能障害患者にヘモグロビン濃度の有意な低下が認められた。第 14 日までヘモグロビン濃度が低下したのは、重度の腎機能障害患者のみであった。腎機能障害患者では、本剤の投与に関連する体液貯留については検討されていないが、当該患者については、体液バランスを注意深く監視すること（警告「体液貯留」を参照のこと）。

副作用

さまざまな状況下で臨床試験が実施されているため、ある薬剤を検討する臨床試験で観察される副作用の発現率は、他の薬剤を検討する臨床試験での副作用の発現率と直接比較することはできず、実際に観察される副作用の発現率を反映していない可能性がある。しかし、臨床試験から得られる副作用情報は、薬剤の使用と関連すると考えられる有害事象を特定し、その発現率を概算する根拠となる。

種々の臨床試験で、生後 8 カ月から 75 歳までの 324 例が本剤の投与を受けている。被験者は、1 サイクルの期間を第 1 日から第 28 日として、連続して最大 6 サイクルにわたり、本剤の投与を受けた（小児患者 8 例を含む）。基礎疾患の悪性腫瘍または細胞毒性化学療法の後遺症を除くほとんどの有害事象は軽度または中等度であり、本剤の投与中止後に回復した。

一般に、有害事象の発現率および種類は、本剤 50 mcg/kg 群とプラセボ群とで同様であった。主な重篤な有害事象は、好中球減少性発熱、失神、心房細動、発熱および肺炎であった。主な有害事象は、浮腫、呼吸困難、頻脈、結膜充血、動悸、心房性不整脈および胸水であった。臨床的介入（本剤の投与中止、用量調節または副作用症状の治療を目的とした併用薬の必要性など）に至った主な副作用は、心房性不整脈、失神、呼吸困難、うっ血性心不全および肺水腫であった（警告「体液貯留」および警告「心血管イベント」を参照のこと）。本剤を投与した患者の 10%以上に発現した有害事象を表 3 に示す。

表 3有害事象（患者の 10%以上に発現した事象）

| 器官系 有害事象 | プラセボ群 n=67 (%) | | 50 mcg/kg 群 n=69 (%) | |
|-------------|-------------------|------|-------------------------|------|
| 全身系 | | | | |
| 浮腫* | 10 | (15) | 41 | (59) |
| 好中球減少性発熱 | 28 | (42) | 33 | (48) |
| 頭痛 | 24 | (36) | 28 | (41) |
| 発熱 | 19 | (28) | 25 | (36) |
| 心血管系 | | | | |
| 頻脈* | 2 | (3) | 14 | (20) |
| 血管拡張 | 6 | (9) | 13 | (19) |
| 動悸* | 2 | (3) | 10 | (14) |

表 3有害事象（患者の10%以上に発現した事象）

| 器官系 有害事象 | プラセボ群 n=67 (%) | 50 mcg/kg 群 n=69 (%) |
|--|-------------------|-------------------------|
| 失神 | 4 (6) | 9 (13) |
| 心房細動／心房粗動* | 1 (1) | 8 (12) |
| 消化器系 | | |
| 悪心／嘔吐 | 47 (70) | 53 (77) |
| 粘膜炎 | 25 (37) | 30 (43) |
| 下痢 | 22 (33) | 30 (43) |
| 口腔モニリア症* | 1 (1) | 10 (14) |
| 神経系 | | |
| 浮動性めまい | 19 (28) | 26 (38) |
| 不眠症 | 18 (27) | 23 (33) |
| 呼吸器系 | | |
| 呼吸困難* | 15 (22) | 33 (48) |
| 鼻炎 | 21 (31) | 29 (42) |
| 咳嗽増加 | 15 (22) | 20 (29) |
| 咽頭炎 | 11 (16) | 17 (25) |
| 胸水* | 0 (0) | 7 (10) |
| 皮膚および付属器 | | |
| 発疹 | 11 (16) | 17 (25) |
| 特殊感覚 | | |
| 結膜充血* | 2 (3) | 13 (19) |
| *プラセボ投与患者よりも、ニューメガ投与患者において発現率が有意に高かった。 | | |

以下の有害事象も、プラセボ群の癌患者よりも本剤群の癌患者に多く発現した。霧視、錯感覚、脱水、皮膚変色、剥脱性皮膚炎および眼出血。本剤群の患者で重度の無力症の発現率が高かった [本剤群の10例 (14%) に対してプラセボ群の2例 (3%)] 以外は、重度または生命を脅かす有害事象の発現率は、本剤群とプラセボ群とで同程度であった。

本剤群の癌患者2例が突然死した。当該事象は、治験責任医師により、本剤と関連あるかもしれないまたはおそらく関連ありとみなされた。2件の突然死はともに、これまでに高用量のイホスファミドの投与を受けてきており、さらに利尿薬の連日投与を受けていた重度の低カリウム血症患者（カリウム濃度が3.0 mEq/L未満）に発現した（警告「心血管イベント」を参照のこと）。

本剤に関連するその他の重篤な有害事象は、視神経乳頭浮腫および心血管イベント（心房性不整脈、脳卒中など）であった。さらに、小児で心拡大が報告された。

患者の10%以上に発現した以下の有害事象は、本剤群の患者と比較して、プラセボ群の患者で同等または高頻度に発現した。無力症、疼痛、悪寒、腹痛、感染、食欲不振、便秘、消化不良、斑状出血、筋肉痛、骨痛、神経過敏および脱毛症。発熱、好中球減少性発熱、インフルエンザ様症状、血小板増加症および血栓性イベ

ントの発現率，患者ごとに輸血された赤血球の平均単位数，好中球減少症（好中球数が 500 cells/ μ L 未満）の持続期間は，本剤 50 mcg/kg 群とプラセボ群とで同程度であった。

免疫原性

本剤の免疫原性を評価した臨床試験では，181 例中 2 例（1%）が，本剤に対する抗体を発現した。この 2 例のうち 1 例で，バリデートされていない 1 つの試験法により，本剤に対する中和抗体が検出された。これらの抗体が存在する臨床的意義は，不明である。市販後調査では，アレルギー反応（アナフィラキシーなど）の症例が報告されている（警告「アナフィラキシーなどのアレルギー反応」を参照のこと）。これらの症例について，本剤に対する抗体の有無は評価されなかった。

試験のデータは，免疫原性試験の結果が本剤に対する抗体陽性とみなされた患者の割合を示しているが，試験法の感度と特異度に大きく左右される。さらに，ある試験法において観察される抗体陽性率は，試料の取扱い，併用薬および基礎疾患などのいくつかの因子の影響を受ける可能性がある。このような理由から，本剤に対する抗体の発現率と他の薬剤に対する抗体発現率との比較では，誤った結論が導かれることがある。

臨床検査値異常

種々の臨床試験で患者から報告された主な臨床検査値異常は，主に血漿量の増加によるヘモグロビン濃度低下であった（警告「体液貯留」を参照のこと）。血漿量の増加は，アルブミンおよびその他のいくつかのタンパク質（トランスフェリン，ガンマグロブリンなど）の血清中濃度の低下とも関連する。臨床症状を伴わないカルシウムの減少が同時に起こることが実証されている。

患者に本剤を連日皮下投与した結果，血漿フィブリノゲンは 2 倍増加した。その他の急性期タンパク質も増加した。本剤の投与を中止後，これらのタンパク質の濃度は正常値に戻った。患者のフォン・ヴィルブランド因子（vWF）濃度は上昇したが，vWF マルチマーパターンは，本剤の投与を受けた健康被験者にみられる正常なものであった。

市販後報告

市販後に生じる有害反応は，規模が不確かな集団から自発的に報告されるため，その発現頻度を確実に推定したり，薬剤投与との因果関係を確立したりすることが必ずしも可能とは限らない。一般的に，以下の 1 つ以上の因子に基づき，これらの有害反応を医薬品の表示（ラベリング）に含めるという判断がなされる。(1) 有害反応の重篤度，(2) 報告頻度または (3) 本剤との因果関係の強さ。

本剤の市販後使用時に，以下の副作用が報告されている。

- アレルギー反応およびアナフィラキシー／アナフィラキシー様反応
- 視神経乳頭浮腫
- 霧視から失明までの視覚障害
- 視神経症
- 心室性不整脈
- 毛細血管漏出症候群
- 腎不全
- 注射部位反応（皮膚炎，疼痛および変色）

（枠組み警告，警告および禁忌を参照のこと）

過量投与

本剤は 125 mcg/kg を超える用量で、ヒトに投与されていない。臨床経験は限られているが、成人患者に 50 mcg/kg を超える用量で本剤を投与すると、心血管イベントの発現率が上昇する可能性がある（警告「体液貯留」および警告「心血管イベント」を参照のこと）。本剤を過量投与した場合、本剤の投与を中止し、毒性徴候について患者を注意深く観察すること（警告および副作用を参照のこと）。本剤による治療の再開については、個々の患者因子（毒性の証拠、本剤による治療継続の必要性など）に基づいて判断すること。

用法・用量

重度の腎機能障害のない成人に対する本剤の推奨用量は、1日1回 50 mcg/kg である。腹部、大腿部または臀部（自己注射しない場合には上腕部）に本剤を単回注射として皮下投与すること。小児については、本剤の安全量および有効量は確立されていない（使用上の注意「小児等への投与」を参照のこと）。

重度の腎機能障害を有する成人患者（クレアチニンクリアランスが 30 mL/分未満）に対する本剤の推奨用量は、25 mcg/kg である。当該患者に本剤を投与するにあたっては、本人のクレアチニンクリアランス（CLcr）の推定値（mL/分）が必要となる。スポット血清中クレアチニン濃度（mg/dL）を測定し、以下の式から CLcr（mL/分）を推定してもよい。

$$\text{CLcr} \approx \frac{[140 - \text{年齢 (歳)}] \times \text{体重 (kg)}}{72 \times \text{血清クレアチニン (mg/dL)}} \text{ {女性患者の場合は, 0.85 を乗じる}}$$

化学療法の終了から 6～24 時間後に本剤の投与を開始すること。血小板数を定期的に監視して本剤の至適投与期間を評価すること。最低値の観測後の血小板数が 50,000/ μ L 以上となるまで、本剤を継続投与すること。比較臨床試験では、本剤は各サイクルで 10～21 日投与されている。1 サイクルあたり 21 日を超える本剤の投与は、推奨されない。

次回に計画される化学療法サイクルの開始 2 日以上前に本剤の投与を中止すること。

ニューメガの調製

1. 本剤は、用時溶解して使用する皮下注射用の保存剤を含まない無菌の白色凍結乾燥粉末である。キットに付属のプレフィルドシリンジに充填されている注射用滅菌水（米国薬局方）（保存剤無添加）1.0 mLを用いて、1バイアル中に含まれる本剤5 mgを溶解すること。溶解後の本剤溶液は、無色澄明の等張液（pH 7.0）であり、濃度は5 mg/mLである。溶解後、未使用の本剤溶液についてはすべて廃棄すること。
2. 溶液の調製中、注射用滅菌水（米国薬局方）をバイアルの側面をつたわせて添加し、内容物を緩やかに振り混ぜること。過度のまたは強い振とうを避けること。
3. このようにして調製した注射剤について、可能な限り投与前に不溶性微粒子および変色がみられないことを目視で確認すること。不溶性微粒子がみられるか変色がみられる場合、本剤溶液を含むバイアルを使用しないこと。
4. 溶解後3時間以内に本剤を投与すること。溶解後の本剤を冷蔵する[2~8°C (36~46°F)]か、室温[25°C (77°F)以下]で保持してもよい。溶解後の溶液を凍結または振とうしないこと。

包装

本剤は、保存剤を含まない無菌の白色凍結乾燥粉末（各バイアルに5 mgのオプレルベキンを含む）として供給される。本剤は、単回投与用の本剤含有のバイアル1本と注射用滅菌水（米国薬局方）1 mLがあらかじめ充填された注射器（プレフィルドシリンジ）1本が入った箱として市販されている。- NDC 58394-004-08

貯法

凍結乾燥した本剤のバイアルおよびあらかじめ希釈剤を充填した注射器（シリンジ）を含むキットを2~8°C（36~46°F）で冷蔵庫に保管すること。本剤粉末については、遮光して保存すること。凍結しないこと。

参考文献

- (1) Du, X. and Williams, D., Interleukin 11: review of molecular, cell biology and clinical use. *Blood*. 1997;89(11):3897-3908.

United States Patent Numbers: 5,215,895; 5,270,181; 5,371,193; 6,066,317; 6,143,524; 6,270,757.



本製品の表示ラベルは、更新されていることがある。本製品の最新の添付文書および詳しい情報については、www.wyeth.com にアクセスするか、当社のメディカルコミュニケーション部門（フリーダイヤル：1-800-934-5556）まで問い合わせること。



Wyeth®

Wyeth Pharmaceuticals Inc.
Philadelphia, PA 19101

US Govt. License No. 3

W10439C011

ET01

Rev 03/09

患者のための情報
ニューメガ®

[nu-meg<a]
(オプレルベキン)

処方箋医薬品

患者向けの本添付文書には、自宅でニューメガを注射してもらうか自己注射する患者とその介護者向けの情報および指示が含まれる。新しい情報が追加された場合には、処方を受け取るたびに、この患者向け情報を読む必要がある。患者向けの本添付文書により、あなたの担当医または他の医療提供者との話し合いの代わりとすることはできない。あなたが受けているニューメガによる治療について疑問点がある場合には、担当医と話し合うこと。

ニューメガについて

ニューメガは、体内での血小板（血液細胞の一種）の産生を促進する医薬品である。ニューメガは、ある種の化学療法を受けた患者向けの薬剤であり、血液中を循環する血小板の数が、危険なほどに減少することを予防するために用いられる。血小板数が少なすぎると、深刻な問題が生じ、死亡にさえ至るおそれもある。切り傷を負ったり怪我をした場合に、血液の凝固を促進するために、血小板は必要である。血小板数が非常に少ない人は、あざができやすく、切り傷を負ったり怪我をした場合に出血をコントロールできない（止血できない）ことがある。血小板数が非常に少ない患者は、他人から提供された血小板を投与される（血小板輸血）ことが多い。ニューメガにより、化学療法実施後の血小板輸血の必要性が減少する可能性がある。ニューメガ投与後の血小板数が依然として少なすぎる場合には、担当医が血小板輸血を推奨することがある。

ニューメガについて知っておくべき最も重要な情報

ニューメガには、副作用が起こる可能性がある。このうちいくつかは、重篤なものもある。ニューメガの投与により、起こりうる最も重篤な副作用を以下に挙げる。

- **アレルギー反応**

一部の患者において、ニューメガは、重篤なアレルギー反応を引き起こす可能性がある。重篤なアレルギー反応の徴候は、顔面、舌または咽頭の腫脹、呼吸困難、嚥下困難または会話困難、息切れ、喘鳴、胸痛、咽喉絞扼感、頭部ふらふら感、意識消失、錯乱、傾眠状態、発疹、そう痒、蕁麻疹、潮紅および（または）発熱である。このような徴候または症状が現れた場合、あなたまたはあなたの介護者は、直ちに担当医に連絡する必要がある。

- **心臓障害**

一部の患者において、ニューメガは心臓障害を引き起こす可能性がある。心臓の激しい動悸を感じたり、拍動が速くなったり脈拍が飛ぶのを感じたり、胸痛または息切れが認められる場合、直ちに担当医に連絡すること。心臓障害の既往がある場合、ニューメガによる治療の開始前に担当医にその旨を伝えること。

ウォーターピル（利尿薬）を服用している場合には、利尿薬によって体内からカリウムが失われる可能性があるため、担当医にその旨を伝えること。ニューメガは心臓障害を引き起こす可能性があり、血液中のカリウム値が低すぎるとこのような心臓障害はさらに重篤となるおそれがあるため、このことは非常に重要である。担当医により、あなたの血液中のカリウムの量が検査される。カリウム値が低い場合、これを改善するために、担当医がカリウム補給薬を処方することがある。

- **体内の水分量の増加**

ニューメガにより、体内に水分が貯留し余分な体液によって体重が増加することがある。一部の患者では、体内の水分量の増加により、投薬または入院を必要とする深刻な問題が生じることがある。水分量の少量の増加であれば、ニューメガの投与を中止してから数日以内に通常、症状は治まる。しかし、数日間のうちに急激に体内の水分量が増加した場合、手足の腫脹、浮動性めまい、息切れまたは胸痛がみられることがある。このような場合、肺や心臓の周囲に水がたまっており、重篤な状態である

ことを意味する。心不全の既往があるか水分の貯留を引き起こすおそれのある薬剤を服用中の場合、ニューメガによる治療の開始前に担当医にその旨を伝えること。

- **眼の障害**

ニューメガは、視神経乳頭浮腫と呼ばれる眼の障害を引き起こしたり悪化させる可能性がある。視神経乳頭浮腫は、視神経（眼の神経）の腫脹である。視神経乳頭浮腫により、霧視から失明までの視力の変化が生じる可能性がある。

- **小児へのニューメガの投与**

ニューメガは成人への使用にのみ承認されているため、これまでにニューメガがあなたの子供に処方されている場合、その理由を子供の担当医と話し合う必要がある。小児に本剤を使用する場合のリスクと副作用について、子供の担当医と話し合う必要がある。ニューメガを投与中の小児にみられる副作用の一つが、視神経乳頭浮腫と呼ばれる重篤な眼の疾患であり、神経の腫脹として眼底にみられる。小児の多くには、視神経乳頭浮腫の徴候はみられないかもしれない。あなたの子供が、頭痛または視力障害を訴えた場合、直ちに子供の担当医に連絡すること。これまでに小児にみられたその他の副作用は、心拍が速くなる、眼の充血、心臓の変化、X線上に認められる骨の変化である。

- **以下のいずれかの症状がみられた場合、ニューメガの使用を中止し、担当医または医療提供者に直ちに連絡すること。**

- 息切れまたは呼吸困難
- 胸痛
- 顔面、手または足の腫脹

- ・ 数日間のうちの急激な体重増加
- ・ 胸部から、心臓の激しい動悸または拍動を感じたり、脈拍が飛ぶ（以上、動悸とも呼ばれる）のを感じた場合
- ・ 霧視や失明などの視力の変化

ニューメガの使用前に、処方箋薬、非処方箋薬、ビタミン類および栄養補助食品を含めて使用中のすべての医薬品名を担当医に伝えること。以下のいずれかの状態または医学的問題を有する場合、担当医または医療提供者にその旨を伝えること。

- ・ 妊婦または妊娠を計画している
- ・ 授乳中である
- ・ 心臓障害がある
- ・ 腎疾患がある
- ・ 眼に障害がある

ニューメガを使用すべきではない患者

ニューメガに対するアレルギー反応歴があるかあったと考えられる場合には、ニューメガを使用しないこと。本情報について疑問点がある場合には、担当医に相談すること。

起こりうるニューメガのその他の副作用

よくみられるがそれほど重篤でない副作用は以下のとおりである。

- ・ 体内の水分量のわずかな増加
- ・ 腕および（または）脚部の多少の腫脹
- ・ 歩行または動き回った際の息切れ
- ・ 貧血（赤血球数が少ない）

上記の副作用は、水分貯留によって生じることがある。ほとんどの場合、体内の水分量の増加は、ニューメガの最後の注射から数日後に治まる。上記の副作用は、さらに重篤な状態に進行する可能性があるため、必ず「ニューメガについて知っておくべき最も重要な情報」の項を熟読し理解すること。

担当医に伝えるべきその他の副作用は以下のとおりである。

- ・ 霧視、頭痛または眼の充血
- ・ ニューメガを注射した部位の消失しないすべての腫脹または内出血

他に何らかの問題が生じた場合には、ニューメガに関連すると考えられるかどうかにかかわらず、担当医に連絡すること。

自宅でのニューメガの投与について知っておく必要のある重要な情報

ニューメガの効果を確認するために、担当医はあなたに血液検査を受けるように依頼し、体内の血小板数を測定する。ニューメガの投与開始後、血小板数が増加するまでには10～21日かかることがある。血小板数が増加するまでの期間は、患者によりさまざまである。ニューメガは、すべての患者に効果的であるとは限らず、担当医の指示どおりにニューメガを投与しても、依然として血小板輸血を必要としたり出血がみられることがある。必ず担当医の指示に従うこと。

担当医があなたに自宅でニューメガを投与するように推奨した場合、あなたおよび（または）あなたの介護者は、ニューメガの調製方法、ニューメガの投与量、ニューメガの注射方法、注射頻度、各ボトルの未使用分の廃棄方法について指導を受ける必要がある。自宅でニューメガを調製し注射する手順に慣れるまでは、ニューメガを注射しないこと。

重要なことは、いかなる場合にも担当医が処方したよりも多量または少量のニューメガを投与しないことである。ニューメガを過量投与すると、不整脈や水分貯留（心臓や肺の周囲に水がたまるなど）のリスクが生じる可能性がある。誤ってニューメガを過量投与した場合には、直ちに担当医に連絡すること。

注射部位 1カ所での注射部位疼痛を避けるために、必ず毎日、注射部位を変えること。毎日ほぼ同じ時間に注射すること。ある日、ニューメガを注射し忘れた場合、その翌日に追加で注射しようとしてはならない。ニューメガを注射し忘れたことを担当医に伝え、通常どおりに、次に予定されている投与を引き続き実施すること。「ニューメガの自己投与方法」の項で、ニューメガの調製方法と注射方法について段階的に説明する。

ニューメガの自己投与方法

ニューメガを調製、注射する前に、以下のすべての指示を注意深く読み、各手順を確実に理解すること。

ニューメガ注射液の調製

1. 最初に、以下の必需品がすべて揃っていることを確認する。

- a. アルコールワイブ（4つ）[\[図を参照\]](#)
- b. 綿ボール（2つ）[\[図を参照\]](#)
- c. 注射用の 1 mL（1 cc）シリンジ（1本）（目盛り線の入ったプラスチック製チューブ）[\[図を参照\]](#)
- d. 注射針（2本）[\[図を参照\]](#)

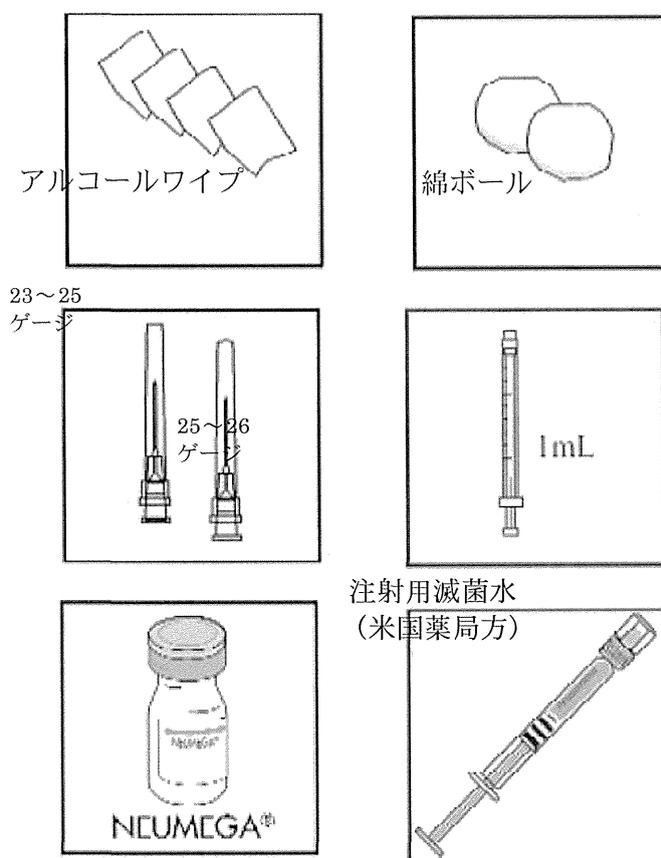
1本の注射針（太さ：23～25ゲージ、長さ：¾～1インチ）は、注射用滅菌水（米国薬局方）があらかじめ充填されたシリンジとともに使用する。

もう1本の注射針（太さ：25～26ゲージ，長さ：½～1インチ）は，1 mL（1 cc）シリンジとともに使用する。

- e. 注射針およびシリンジを廃棄するための耐穿刺性の容器（“シャープスコンテナ”）
- f. 以下を含むニューメガキット（1キット）

ニューメガ粉末製剤のボトル [図を参照]

注射用滅菌水（米国薬局方）があらかじめ充填されたシリンジ [図を参照]（以降，プレフィルドシリンジと呼ぶ）



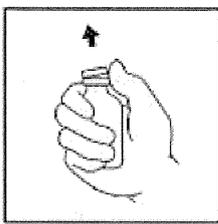
- 2. ニューメガを自己投与するときはそのつど，ニューメガ粉末製剤の新しいボトルと新しいプレフィルドシリンジを使用しなければならない。

ニューメガ粉末製剤のボトルとプレフィルドシリンジに印刷されている有効期限を確認すること。現在の年月がニューメガ粉末製剤のボトルまたはプレフィルドシリンジに印刷されている年月を過ぎている場合（すなわち，ニューメガまたはプレフィルドシリンジの使用期限が切れている場合）には，ニューメガ粉末製剤またはプレフィルドシリンジを使用しないこと。ニューメガおよび（または）プレフィルドシリンジの使用期限が切れており，その代替品が必要であることを担当医に知らせること。ニューメガ粉末製剤とプレフィルドシリンジの使用期限が切れていなければ，続いて以下の手順を実施する。

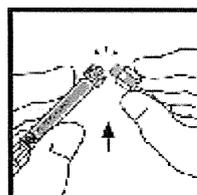
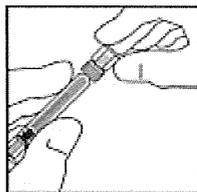
石鹸と水で手を洗う [図を参照]



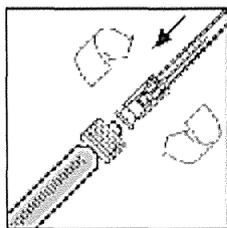
3. “ニューメガ”とラベル表示されたボトルを取り出し、保護キャップを開ける [図を参照]。アルコールワイプ（滅菌済）で、ボトル上部のゴム製ストッパーを拭く。ボトル上部のゴム製ストッパーの上にアルコールワイプを残しておく。清潔な平面の上にボトルをまっすぐに立てる。



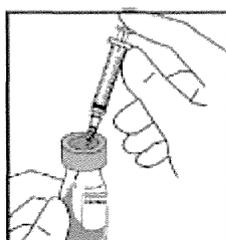
4. 不正開封防止キャップをつけたまま、23～25 ゲージの注射針をパッケージから取り出す。注射針を同じく清潔な平面の上に置く。プレフィルドシリンジを取り出す。シリンジの先端部から不正開封防止キャップを取り除くために、シリンジを一方の手に斜めに保持する [図を参照]。もう一方の手で、不正開封防止キャップを上下に動かして開封する [図を参照]。ミシン目の入っている部分で開封し、白色のシリンジ先端部を残す。開封後、不正開封防止キャップを取り除き、廃棄する。



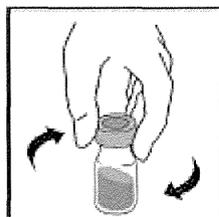
5. プレフィルドシリンジを保持したまま、23～25 ゲージの注射針を手取る。キャップを付けたまま、この注射針を時計回りに回転させながらプレフィルドシリンジに取り付けて完全に固定する [図を参照]。その後、注射針のキャップをそっと引っ張って取り除き、廃棄するが、注射針に手を触れたり、注射針をどこにも接触させてはならない。重要なのは、感染症を予防するために注射針の滅菌状態を保つことである。



6. ニューメガ粉末製剤のボトルを手に取り、ボトル上部のゴム製ストッパーの上に残しておいたアルコールワイプを取り除く。清潔にしておいたゴム製ストッパーには手を触れないこと。ニューメガのボトルを一方の手で保持しながら、もう一方の手で、注射用滅菌水（米国薬局方）を含むプレフィルドシリンジに取り付けた注射針を、ゴム製ストッパーの中心部を通してボトル内に押し込む。注射用滅菌水（米国薬局方）がニューメガのボトルの壁面を伝って流れるように、ニューメガのボトルの側面に注射針を慎重に配置し、シリンジのピストンをゆっくりと押し込む [図を参照]。



7. シリンジからニューメガのボトルに注射用滅菌水（米国薬局方）全量を注入した後に、ゴム製ストッパーから注射針を引き抜く。“ニューメガの注射”の項の手順 7に記載のとおり、使用済みの注射針およびシリンジを廃棄する。注射針に再びキャップをしないこと。
8. ニューメガ粉末製剤が注射用滅菌水（米国薬局方）にすべて溶解し、ボトル内の溶液が清澄になるまで、ボトルを緩やかに振り混ぜる [図を参照]。ボトルを振とうしないこと。ニューメガを振とうさせると、本剤がダメージを受けるため、適切な効果が得られないことがある。



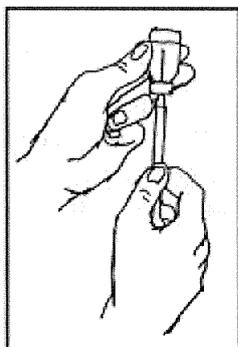
ボトル内の溶液をチェックすること。溶液は、清澄かつ無色でなければならず、粉末やちりを一切含んではならない。溶液が濁っていたり色がついているか、溶液中に粒子がみられる場合には、ニューメガを注射しないこと。担当医、看護師または薬剤師に連絡し、使用できないニューメガの処分法について指示を受けること。

ニューメガを注射用滅菌水（米国薬局方）と混合・溶解し、混合・溶解後はできるだけ速やかに使用すること。ニューメガと注射用滅菌水（米国薬局方）を混合・溶解してから、この溶液を使用するまでに3時間以上経過してはならない。ニューメガと注射用滅菌水（米国薬局方）の混合溶液は、ニューメガのボトルに入れたままで室温または冷蔵庫内で3時間まで保存可能である。ボトルを確実に遮光して保存すること。ニューメガと注射用滅菌水（米国薬局方）の混合溶液をシリンジ内に保存してはならない。

9. ニューメガ粉末製剤を注射用滅菌水（米国薬局方）に溶解後、新しいアルコールワイプ（滅菌済）で、ボトル上部のゴム製ストッパーを拭き、ボトル上部のゴム製ストッパーの上にアルコールワイプを残しておく。
10. 1 mL（1 cc）のシリンジと 25～26 ゲージの注射針を用意し、パッケージから取り出す。手順 4～6で説明したように、この注射針を 1 mL（1 cc）シリンジに取り付ける。これは、ニューメガを皮膚に注射するために使用する注射針およびシリンジである。

あなたが投与することになっているニューメガの正しい量を示すシリンジ上の線または数字（担当医または看護師が指示する）の位置まで、ピストンを後ろに引いてシリンジを空気で満たす。

11. ニューメガ溶液のボトルを手に取り、ボトル上部のゴム製ストッパーの上に残しておいたアルコールワイプを取り除く。清潔にしておいたゴム製ストッパーには手を触れないこと。ニューメガ溶液のボトルを一方の手で保持し、ゴム製ストッパーの中心部を通して、ボトル内に注射針を押し込む。シリンジからボトル内に空気を注入する。
12. ボトルとシリンジを逆さまにする。注射針の先端部を溶液内に入れたまま、ピストンをゆっくりと後ろに引く [図を参照]。あなたが投与することになっているニューメガの正しい量を示すシリンジ上の線または数字（担当医または看護師が指示する）の位置まで溶液が達したらピストンを引くのを止める。



13. シリンジ内に気泡が入っていないかどうかをチェックする。シリンジ内に気泡を確認した場合、ピストンを押して気泡をボトル内に押し返す。シリンジ内の溶液は、清澄かつ無色でなければならず、粒子や気泡を一切含んではならない。

あなたが投与することになっているニューメガの正しい量を示すシリンジ上の線または数字（担当医または看護師が指示する）の位置まで溶液がシリンジ内に満たされているかどうかさらに確認すること。シリンジ内の溶液量が少なすぎる場合には、あなたが投与することになっているニューメガの正しい量を示すシリンジ上の線または数字の位置までピストンを後ろに引く。溶液量が多すぎる場合には、あなたが投与することになっているニューメガの正しい量を示すシリンジ上の線または数字の位置までピストンを押し込む。正しい量であることを確認したら、手順 14に進む。

14. 注射針をボトルから引き抜く。注射針が垂直になるようにしてシリンジを保持し、シリンジの側面を指で軽くたいて、残っている気泡をシリンジの上部に移動させる。
15. シリンジと注射針を垂直になるように保持したまま、ピストンを少しだけそっと押し込んで、シリン